

議案 1 平成 26 年度事業報告

【事業実施期間】 平成 26 年 6 月 19 日～平成 26 年 3 月 31 日

【事業の成果】

初年度として、東京都・公益財団法人東京都歴史文化財団との共催事業「東京迂回路研究」を中心として事業を展開しました。東京都内の多様な医療・福祉・ケア・コミュニティ等に関わる団体や個人との新たなネットワークを構築したとともに、それを積極的に発信していきました。シンポジウムやトークシリーズは概ね好評を博しました。活動報告書として「JOURNAL 東京迂回路研究 1」を作成、大きな反響を集めています。また、中央ろうきん助成プログラムの支援を受け、「みなと・シネマ哲学カフェ」のシリーズも開始しました。事務局形成としては、週 1 回事務所に勤務しミーティングを重ねることに加え、メールやクラウドサービス等も活用することで密な連絡を取り合うことができました。

なお、平成 26 年度に実施した事業は以下の通りです。

1. 特定非営利活動に関する事業

事業名	定款上の事業 項目	事業内容	実施 時期	実施場所	対象者
東京迂回路研究	(1)(2)(3)	医療・福祉・ケア・コミュニティ等に関わる活動に関する研究事業	通年	都内全域、 及び都内 近郊	福祉関係者・芸術関係者・一般
みなと・シネマ 哲学カフェ	(1)(2)	ケアに関わる映画上映と対話の場づくりを行う事業	通年	港区	福祉関係者・芸術関係者・一般
その他の事業	(3)	港区周辺の各種事業への企画協力等	通年	港区	港区民・一般

2. その他の事業

なし

【各事業の活動内容等】

(1) 東京迂回路研究

共催団体：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

共催団体負担金：5,500,000円

実施内容：

①「もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編」

東京都および近郊エリアの、医療・福祉施設、当事者団体、ケアに関わる団体等を訪問し、活動の参与観察や関係者への聞き取りを行う「調査編」と、その調査で得られた見解や視点を参加者と共有し、ともに話し合い考える「報告と対話編」から成る研究プロジェクト。調査・報告・対話のサイクルを通じ、さまざまな場を捉え直すことを試みた。

□調査編 [調査先一覧] (訪問順) 平成26年6月～平成27年3月

- ・医療法人社団光生会 平川病院 造形教室（東京都・八王子市）／平成26年6月27日
- ・慶福育児会 麻布乳児院（東京都・港区）／平成26年6月30日
- ・伊豆大島 元子おばちゃん家（東京都・大島町）／平成26年9月4日-5日
- ・RFC(レインボーフォスターケア) (全域)／平成26年9月8日
- ・就労継続支援B型施設 Crazy Cats（東京都・世田谷区）／平成26年7月31日・10月24日
- ・宅老所 井戸端げんき(千葉県・木更津市)／平成26年11月29日
- ・特定非営利活動法人 山友会（東京都・台東区）／平成27年2月26日
- ・community center akta（東京都・新宿区）／平成27年3月12日

□報告と対話編 : 会場：芝の家（東京都・港区）

第0回 平成26年6月12日

「生き抜くための〈迂回路〉とは何か」

参加者数：14人

第1回 平成26年7月10日

報告:精神科病院における造形活動について ほか

対話:哲学カフェ「生き抜くための〈表現〉とは」

参加者数：4人

第 2 回 平成 26 年 8 月 7 日

報告:日常の〈表現〉—乳児院の事例から

対話:哲学カフェ「生き抜くための〈表現〉とは その 2」

参加者数：4 人

第 3 回 平成 26 年 9 月 11 日

報告:人がつながる場—伊豆大島の事例から

対話:哲学カフェ「暮らす場所のえらびかた」

参加者数：8 人

第 4 回 平成 26 年 10 月 16 日

報告:"家族"を考える—LGBT の里親支援活動の事例から

対話:哲学カフェ「"家族になる"とは」

参加者数：9 人

第 5 回 平成 26 年 11 月 20 日

報告:"社会参加"への道—精神障害者就労支援施設のライブハウス運営から

対話:哲学カフェ「"社会参加"してますか？」

参加者数：4 人

第 6 回 平成 26 年 12 月 11 日

報告:共にいること—ある宅老所の日常から

対話:哲学カフェ「ケアって何？」

参加者数：9 人

■開催時の状況報告

・第 0 回：代表・長津より企画概要説明後、「〈迂回路〉と聞いてイメージする言葉」について来場者全員がそれぞれ白紙に記載。そこから 1 時間、じっくり対話の場をひらいた。迂回路はソリューションなのか？ ゴールを見据えないと迂回路ではないのか？ 迂回路はあとから気づくものか？ などなど、それぞれの「迂回路」について思いを馳せる時間となった。

・第 1 回：前半は、東京都八王子市の平川病院で 40 年に渡り活動を続ける〈造形教室〉について報告。精神科医療を巡る現在の状況、平川病院での取り組み、デッサンや合評会の役割等に

ついて、写真を交えて話しあった。

報告を踏まえて、後半は「生き抜くための〈表現〉とは」というテーマで、参加者全員で話した。日常生活のなかで〈表現〉していると思うのはどんなとき？という問いかけにはじまり、たとえば肩こりのような身体のサインとしての〈表現〉、「描く」「話す」など表現の形式によって表されることの違い、〈表現〉の切実さの度合いやそこに「境界」は存在するのか？といった話題がひろがった。

・第2回：都内の乳児院における日常の取り組みと、そこでめざされる関係のあり方や、垣間見える〈表現〉について報告した。また後半は、前回のテーマを踏襲するかたちで、「生き抜くための〈表現〉とは その2」をテーマとし、哲学カフェのスタイルで話し、考える時間をもった。

・第3回：前半は伊豆大島の「元子おばちゃん家」の事例について、赤ちゃんからお年寄りまで集まる場、それが立ちあがった経緯、事業の位置づけなどに重点をおき報告した。後半は、「暮らす場所のえらびかた」をテーマに、暮らすこと、住むこと、東京23区や中心部と、伊豆大島の暮らしのありかたの相違などについてさまざまな方向から考え、話し合った。

・第4回：前半は、LGBTの里親支援を行うRFC(レインボーフォスターケア)の活動を通じて見えてくる、「家族」の問題について報告した。後半では、「家族”になるとは？」というテーマのもと、話し合った。初参加の方が多い回だったが、それぞれが経験した様々な”家族”のかたちの話から、家族役割や、「ふつう」の家族とは？などの問いへと発展し、「家族”である／になることにまつわる人と人との関係性について、あらためて思いを馳せる時間となった。RFC代表の藤めぐみさんにもご参加いただき、充実した回となった。

・第5回：世田谷区梅ヶ丘で福祉事業所としてライブハウスを運営する「Crazy Cats」の活動をもとに「社会参加」について考える回。報告では、「脱施設化」を指向してつくられた活動が、障害者福祉の制度によって枠組みが付くことでどのように変遷していったのかを時系列にして紹介した。対話では、もうすぐ「社会人」となる参加者の方の発言がきっかけとなり、社会と呼ばれるものとわたしたちの関係について考えた。

・第6回：千葉県木更津市の宅老所「井戸端げんき」と、その日常を「共にいること」という視点から報告した。「井戸端げんき」は奇跡の宅老所とよばれるところ。高齢者、介護者、ボランティア、旅人・・・さまざまな人が、さまざまなまま、でも共にいることがそこでは可能と

なっている。では、それはどのようにして可能となっているのかを明らかにすることを試みた。後半は、報告の感想から、「ケアってなに?!」というテーマのもと話した。「ケア」を別の言葉で言い替えるとどのような言葉がしっくりくるか。一言ではいえない多義的なことを言おうとして「ケア」という言葉を用いているのでは。ではケアという言葉で、何を言おうとしているのか。ケアのプロフェッショナル性とはなにか、あるのかなどについて考えをめぐらせる時間となった。

②「トークシリーズ「迂回路をさぐる」」：会場：東京文化発信プロジェクト ROOM302

造形・音楽・映画・雑誌・演劇など、アートの様々な手法を通じて、病や障害を持つ人たちとの活動を展開している人をゲストに招き、活動についてお話しいただくトークシリーズ。ゲストトークに加え、参加者を交えた対話の時間を持った。対話を通じ、参加者それぞれが主体的に様々な背景を持つ人々が共に生きていく社会と、アートとの関わりについて考察を深めることを狙った。

第1回 「自閉症の妹と向きあうための映像表現」／平成26年6月18日

赤崎正和(映画「ちづる」監督)

参加者数：21人

第2回 「対話の実験:とつとつダンス、劇団ティクバ+循環プロジェクト」／平成26年7月2日

砂連尾理(ダンサー/振付家)

参加者数：13人

第3回 「多様な個性を活かす即興アンサンブル」／平成26年7月16日

ナカガワエリ(即興楽団UDje())主宰、おどるボイスパフォーマー)

参加者数：26人

第4回 「精神科クリニックにおける造形活動の実践」／平成26年8月20日

梅津正史(精神保健福祉士)

参加者数：30人

第5回 「社会を楽しくする障害者メディアのつくりかた」／平成26年9月3日

里見喜久夫(雑誌「コトノネ」編集長)

参加者数：15人

第6回 「Living Together Lounge:ともに生きているということ」／平成26年9月17日

アキラ・ザ・ハスラー(アーティスト)

参加者数：12人

第7回 「迂回路をさぐる」／平成26年10月1日

参加者数：6人

■開催時の状況報告

・第1回：大学の卒業制作をきっかけに、自閉症を持つ妹の日常をドキュメンタリー映画化した映画感覚・赤崎正和。撮影の過程を通じて生じた自身の思いや家族関係の変化、表現者としての活動との関わりについて伺った。何気ない家族の日常やつながりを撮ることで、“障害者”としてではなく、キャラクターをもった一人の人間としての妹が見えてきたという。自分のなかの差別意識や家族関係の変化、作品という〈表現〉が開く可能性について、等身大の言葉でお話いただいた。

・第2回：関西を拠点に、ダンサー・振付家として活動する砂連尾理（じゃれおおさむ）による「対話の実験：とつとつダンス、劇団ティクバ+循環プロジェクト」。2007年、思いがけず始まった障害のある方とともに展開した「循環プロジェクト」、ドイツのカンパニー「劇団ティクバ」とのワークショップ・舞台公演、また京都・舞鶴の特別養護老人ホームで月1回のペースで続けられている「とつとつワークショップ」と、その舞台公演。そして、東日本大震災で被災された方への聞き取りをもとにつくった作品のことなど、これまでの活動を映像をみながらじっくりお話いただいた。自分にとって未知の存在との出会いを繰り返した結果、それらの活動があるという。その展開そのものが、言葉とはまた違う、異なる者との対話の軌跡であるように思えた。

・第3回：主宰する即興楽団UDje()の活動や、それを始めるに至った経緯、それまでの活動のことなど、ひろくお話しいただいた。単に即興的に音楽を奏でることだけでなく、ワークショップなどを通じて生まれる出来事そのものを「アンサンブル」と捉えるという視点や、このような活動を「生きるための戦略」として行っているという発言が、「迂回路」という考え方にも非常に近いように感じ、非常に印象に残る時間となった。

・第4回：大学院の日本画科でアウトサイダー・アートを研究する傍ら、障害のある人々との造形活動を行ってきた梅津正史が、現在自身が精神保健福祉士として勤務するクリニックで、行っている活動についてお話いただいた。参加者が、それぞれの仕方で日記を綴り、それを紹介しあう「Reborn 部」。そこから発展して、各自の表現を、レンガを積み重ねるようにしてネット上にアーカイブしていく「Scrap of Reborn」。個と集団、内部と外部、日常と表現の間をつなぐ仕掛けに、〈迂回路〉を開く可能性を感じ、今後の展開をぜひ見てみたいと思わせる内容だった。

・第5回：雑誌「コトノネ」は、デザイン会社を経営している里見喜久夫が、東日本大震災を契機にスタートしたプロジェクト。「再生から共生へ」と書かれた第1号から、登壇いただいた時（第11号まで発刊）まで、障害のある人の就労や、「健常者」の中で既存の枠組みをずらすような活動をしている人を取り上げることで、世の中の価値観を転換させるような考え方に出会うきっかけを作り出している。これまでのメディアではできなかった方法で障害の「今」を語る雑誌の背景には、編集としての立場を超え、自分の感覚で現実を一步一步見つめてゆくことから始まるリアリティがあるのだと感じさせられた。

・第6回：これまでの表現活動への関わりや、Living Together Lounge を始めるきっかけとなった出来事について、映像を交えながらお話しいただいた。セクシュアル・マイノリティをめぐる「コミュニティ」の在処についてや、共生社会と言った際に想起される「(これから)ともに生きよう」というイメージとは一線を画し、「すでにともに生きている=Living Together」と語ることの戦略性についての議論が、強く印象に残る回となった。

第7回：トークシリーズ最終回は、ゲストを呼ばず、参加者同士でテーマについて話す回とした。まず、参加者自身は、どのような動機をもってこの場に参加し、個々のトークをどのように受け止めたのかを共有しつつ、第1回～第6回の内容について振り返った。そこからキーワード--多様性、境界をあげ、さらにそれについて話しあった。多様性と境界という、根本的なテーマについて、じっくりと言葉を交わし、考えを積み上げていく時間となった。

③[シンポジウム] 東京迂回路会議—多様性と境界をめぐる：アーツ千代田 3331 1F コミュニティスペース（東京都・千代田区）

パネリスト:小山田徹、坂上香、鈴木励滋、長津結一郎

進行：井尻貴子

参加者数：43人

小山田徹（美術家、京都市立芸術大学教授）、坂上香（ドキュメンタリー映像作家、NPO out of flame 代表）、鈴木励滋（地域作業所カプカプ所長）の3名をゲストに迎えた。

まずはゲスト3人によるプレゼンテーション。

小山田からは「共有空間の開発—小っちゃな火を囲むプロジェクト、対話工房などから」と題して、パフォーマンス集団「ダムタイプ」での体験からはじまり、共有空間をつくってきた経緯についてお話いただいた。また最近の実践として、自身の義理の母親がやっているお粥屋さんの話がその後の議論でも注目を集めた。

坂上からは、「暴力のあとを共に生きるために—out of frame のささやかな試み」と題して、映画「トークバック」に至る、自身が映像を通じて行っているプロジェクトについて、その背景から現在の活動に至るまでを概観していただいた。「私たちをつなぐのは、私たちそれぞれの『物語』であり、『語ること／呼応すること』であり、エンパワーメントである」という言葉が印象に残った。

鈴木からは「場を作る—カプカプの実践を通して」と題して、横浜の団地のなかで運営している喫茶「カプカプ」の基本にある考え方—障害のある人を中心においた「接客」という考え方を中心に、さまざまな背景のある人たちが場をともにしている経験についてお話いただいた。

当NPO 法人代表の長津からは「生き抜くための技法」をさぐる—東京迂回路研究 活動報告」として、1年間の「東京迂回路研究」でみえてきたことについて報告した。

その後のディスカッションでは、「迂回路」とメインストリームの関係性についてや、「多様性」という言葉じたいが形骸化してしまう危険性についてなど、さまざまな議論が展開された。

④[活動報告・論考] ジャーナル 東京迂回路研究 1 / 平成27年3月発行

B5変型版、1000部発行

1年間の活動の報告と、論考をまとめたジャーナル。第1号では、初年度の活動を経て導き出された「対話型実践研究」の手法とその様相を描き出し、さぐり出した「迂回路」とは何だったのかを浮かび上がらせることを試みた。

⑤ウェブサイト・Facebook での発信等

■公式サイト運営状況（平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 23 日）

ユーザー数 3,101

ページビュー数 24,446

■ページ画面

トップページ



プログラム紹介ページ



(2) みなと・シネマ哲学カフェ

助成：中央ろうきん助成プログラム

助成金：300,000円

① 「みなと・シネマ哲学カフェ」

vol.1 「人生、ここにあり！」：シバウラハウス5Fバードルーム

平成26年8月2日

ゲスト：鈴木励滋

参加者数：19人

vol.2 「9月11日」：光明寺

平成26年11月29日

ゲスト：坂倉杏介

参加者数：8人

(3) その他の活動等

① ご近所イノベーション学校への企画協力事業

■ トークシリーズ まちで生きること まちで死ぬこと

1. 平成26年10月6日（月）芝の家

「死をご近所でどう受け止めるか」

ゲスト：入江杏（絵本作家・文筆家）

参加者：24人

② 芝の家との共催事業

■ 芝の家・親子アートワークショップ 「からだアートでコミュニケーション」

平成26年7月3日（木）芝の家

ゲスト：砂連尾理

参加者：16人

(4) 各種メディアでの紹介

・ J-wave 「RADIO DONUTS」内、「BUN-PRO TOKYO CREATIVE FILE」出演 平成27年1

月10日

番組ウェブサイト：<http://www.j-wave.co.jp/original/creativefile/>